

春日城跡の後

春日城跡

背の山、居館からみると南西の山の尾根に春日城がある。居館のある平面の海拔は七七〇メートル、春日城最高部はおよそ八九〇メートル、一二〇メートルほど高い。下に示す春日城の図のケバは、ほぼ等高線に沿って書いてあるので、山のかたちについては、およその推定ができると思う。西側は急斜面で、まず登るには困難であるが、古屋口の地字があり、それは小屋口であるから、西からの登路もあつたはずである。いまは、康国寺の脇から法蓮寺の沢を通ってゆるやかな登り道があいているが、昔からかどうが不明である。最下の郭は、海拔八二五メートルの高さで南北四五メートル・東西一四メートルの長方形である。この廊にはお宮の舞台がつくられているので舞台を建てる時、

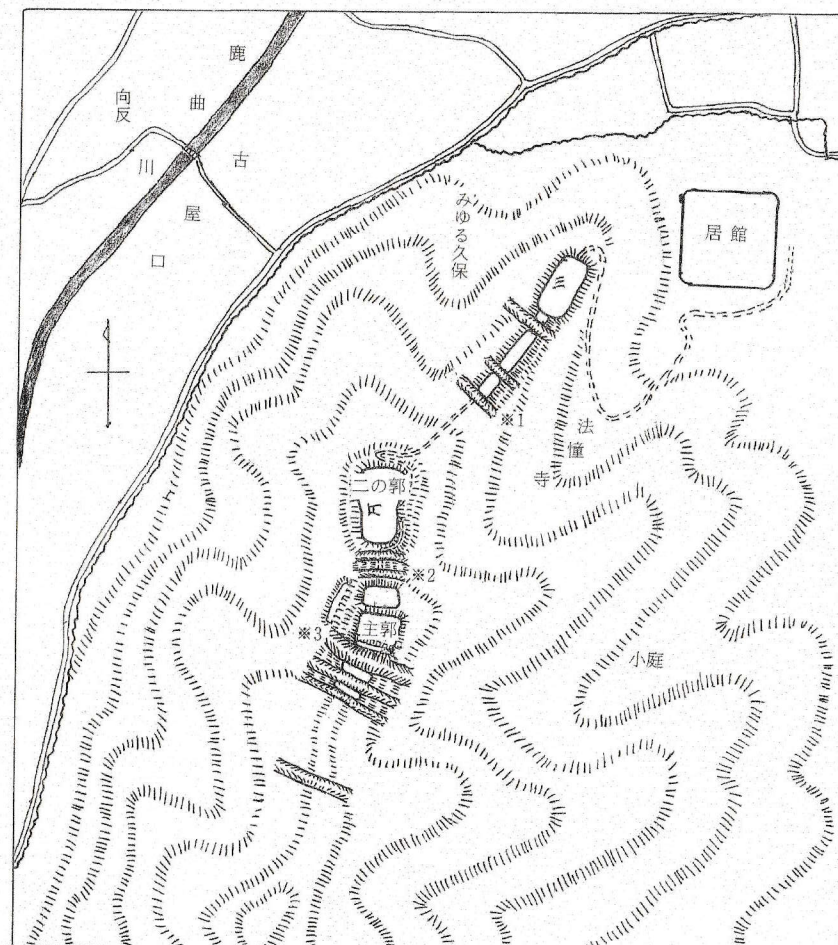


図13 春日城跡

622

郭面を改変している可能性もある。この最下の郭を、仮に、三の郭とよぶことにする。

三の郭から南へ尾根は上りになるが、尾根を四〇五メートルの幅にならして平場にしてあるので、ちょうど、細長い板を斜めにしたような、郭状の細長い面が一〇〇メートル余続き、ここに、そう深くはないが三条の堀割がある。

それから斜面が急にきつくなつて、つづら折りに登って、二の郭の東がわに着く。二の郭は、ひょうたん形に近く、南北四一メートル、北側広い部分の東西一七メートルほどである。この二の郭にはいま神社がある。秋葉社と伝える。

二の郭から主郭への尾根は、いく分舟底形になり、この間二条の堀割があつて主郭の根本につく。

主郭は南側に大土塁を築き、南北二一メートル、東西一〇メートルの長方形で、主郭から六メートルがった北側に東西一〇メートル・南北八メートルの副郭と、土塁の南に、四条の大堀割を備えているし、主郭の西側に帯曲輪がある。

図中、※1・※2と記した二つの堀割は、尾根の坂に掘られ

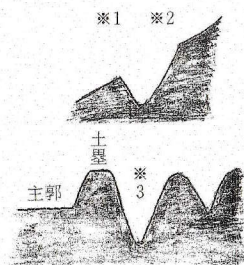
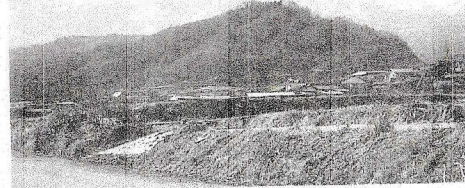


図14 堀割断面

端から堀の底まで、一五メートルほど（斜面の長さ）落ち込んでいる。

総体的にみて、春日日本郷側の平地から攻め上られることへの備えは当然だが、南からの尾根づたいに攻められることに、たいへん警戒をはらっている。天神城の項で述べた「芦田四郎右衛門 春日の城を再興す」の春日の城は、この構えからみて、春日城ではないように思われる。

さて、『長野県町村誌』では、この春日城のことを「春日穴小屋城」という見出しをつけ、古い名は「穴小屋」とよんだと記している。『経亮本節用集』によれば、「小屋」とは「土民の隠るる処なり」と記している。戦争のとき、武士は戦うが、その女子供や土民は集まって難を避ける。この避難所が小屋であるとの意味であろう。一方、瀬下敬忠は、『千曲之真砂』で获生往来の説をひき、「往来先生いわく惣じて頃年小屋と称するは檣上構の屋敷を小屋と称す。譬の如きなる小城なりと云々」と述べている。おそらく「小屋」の用語は、両方に使用されていたであろうが、春日城に「穴」の字をあてられたのは、なぜであろうか。しかし、柳沢氏蔵の古図にも「穴小屋」とある。



写9 春日城跡遠景（中央の小高い部分）

623

『長野県町村誌』では、武田勝頼、続いて織田信長が敗死した天正十年六月二十三日から、依田信蕃が春日へ戻って、以後北条氏と戦ったことを記し、その末に

信蕃、穴の名を忌みて三沢小屋と称するは、諏訪上下社に御射山ありて、諏訪文書では御射山を三澤山とも書す。春日湯沢の奥に三沢山あり。是なり。また芦田小屋と称す。一（中略）
真田昌幸、芦田小屋の麓に來り、信蕃に會して和を談ず等、芦田家記に載す。

また、三沢山湯沢の奥にあり。麓に押出しの城屈ありて、これを三沢小屋・芦田小屋と云うも非なり。信蕃の英雄、何ぞさる深谷に屈居せん。穴小屋の称は穴咋の転にて、信蕃穴の名を忌みて、三沢小屋・芦田小屋と自称せしは、城北に小屋口の名あるにても明瞭なる事、論を待たざるなり。

と、湯沢の奥に三沢山があつて、そこに城屈はあるが、三沢小屋はここではなく、信蕃は春日城を穴小屋とよぶことをきらい三沢小屋と呼んだのだ というのである。

そこで、天正十年の依田信蕃と北条氏政との戦いに関連し、信蕃のこもったところの地名と、その出典を列記すると、

『依田記』天正十年七月 春日の山の奥、三沢小屋と申す所。

『乙骨太郎左衛門覚書』 芦田小屋より罷り出で。

『寛永諸家系図伝』中沢久吉 三沢の山小屋に桶籠る時。

『高付久利 見沢山の小屋にたてこもる。』

『関 信正 山小屋にこもり』
『小林重吉 見沢山の小屋に籠り』

湯沢（西の久保）の奥に三澤山があるのだから、右の用い方であるかぎり、三沢小屋と、春日城は同じではないと思われる。

小倉城跡は、細小路川の主流で、蓼科山でもかなり奥深い溪谷を見下ろす岩山に位置している。岩山といっても独立した山ではなく、蓼科火山によって形成された裾野の一角であり、連続した尾根が北方へと続き、やがては式部城跡や布施城跡、望月城跡の位置する同一の尾根へと連なっている。郭は、主郭を中心にして北側が二の郭、南側が三の郭であり、いづ

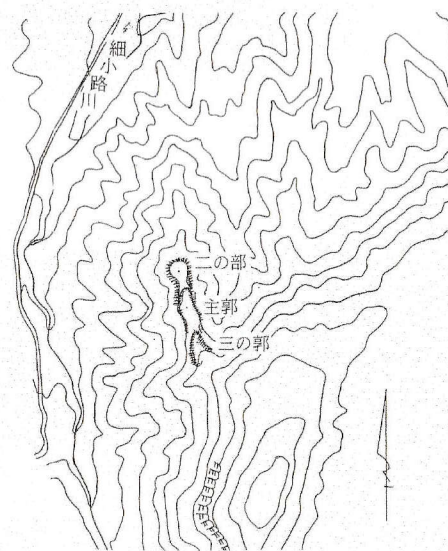
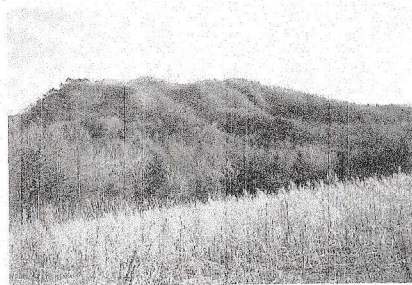


図15 小倉城跡見取図

れも山頂部の僅かな平坦部を利用している。ここからの眺めは、北北西から北東方向まで、極めてよい眺望であり、特に浅間山連山の眺めはすばらしい。また、南側より連なってきた尾根は、東方にも広がって連続した山系を作り出し、西側眼下には、細小路川によって形成された深い谷が春日城跡方面に延びている。主郭は、標高二二五、二の郭は一〇一、三の郭は一三三、二の郭を測り、細小路川までの標高差は、一五〇、二〇〇である。郭の西側は、岩の崩落箇所が目立ち、険しい断崖状になっている。各郭には曲輪は無いといってよいが、主郭西側の真下にはテラス状に開けた小規模な曲輪が僅かに存在している。ここには、洞穴というよりも小規模な岩陰があり、覗き穴のような小さな穴も開いている。曲輪に関する施設は、この他には確認されていない。

空堀は、極めて要害な立地条件をなしていることも関係するのであるが、現在までの調査では確認されていない。しいていえば、郭の間の谷状地形が、自然の地形を利用した空堀ともみることができ

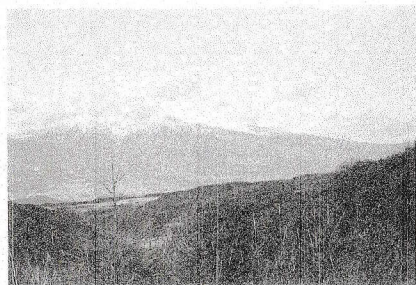
る。小倉城跡の歴史的背景は、文献でも明確ではないが、春日城跡と関係した伝承が残っているで紹介する。『信蕃



写10 春日小倉城跡

は、武田勝頼に従って東海道を進入し、勝頼が長篠で敗退した後も、独立無援のまま遠州二俣城や駿州田中城で家康と戦って、主家の武田家が滅亡するまで、三年間も頑張っていた。

武田氏滅亡後織田信長の武田家旧家臣に対する探索の目を逃れるために、信蕃は家康に置かれていた。佐久は織田信長の領地となり、澁川一益が小諸城で佐久を支配した。しかし、天正十年六月二日には、信長が



写11 小倉城跡からの遠望

家臣明智光秀に本能寺で殺されたので、支配者を失った豪族らは、自立して領土の拡張に奔走していた。信蕃は本能寺の変後、兵をあげ、故郷に帰って芦田の支城である春日城に拠った。ところが、そこへ北条氏直の四万の大軍が押し寄せてきた。兵をあげたばかりの信蕃は、この大軍に敵すべきもないので、城の裏山に続く南方一里半（六、七）の小倉城にたてこもった。

この城は、切り立った岩石の山で、天然の要害になっており、その南方の岩山には、十畳ぐらいの広さの岩窟がある。岩窟の内部には、今でも乾いた砂が敷いたように積もっていて、入口の上には目の高さのところに窓のような穴があいている。そこから覗くと、山の麓が一